

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2012年(平成24年)7月16日 月曜日

無料

第2号

毎月発行

創刊 2012年(平成24年)7月16日 月曜日

特集

石巻は復興しているのか 最大の津波犠牲者・被災者を出した 宮城・石巻の現地取材レポート

「第二の被災」は 何が何でも回避 しなければならぬ

昨年の東北大震災と巨大津波襲来で最大の犠牲者、被災者を出した宮城県石巻市。早いもので、あれからもう一年四カ月も経った。今回の取材中に見た街の風景は、震災発生当初のショックな映像に比べれば大分整備された。壊れた家屋、建物は大分撤去された。街中にガレキはほとんど見られない。とはいえ、半壊のまま放置された家屋も建物もあちこちにある。全壊の跡と思われる空き地もいたるところに見られる。津波で大きく歪んだ橋

桁や欄干に津波の巨大な破壊力の傷跡がまだ残っている。しかし、外見はこの一年四カ月で大きく変化していることは確かだ。では、復興は進んだのか。

この石巻がいま置かれている地点をひとりで表現するとすれば、復旧・復興の第二ステージに移行するための長く苦しい試行錯誤が続く過渡期の真っ最中にあるといえる。

復旧の第一ステージ

震災発生直後からしばらくは、生き残った被災者は、生きるための環境回復に一直線にまい進した。被災者同士も助け合った。日本全国、海外の支援者も同じ方向を見て、絆という言葉を掲げ、ともに歩んだ。国、県、市町村の行政も、スピードはともかく、同じ方向を向いていた。

この大震災でありえない状況に陥ったことで、言い尽くせないほどの苦しみを潜り抜けたが、その状況下での唯一の救いは、みなが進んでいく方向に迷いがなかったことだ。とにかく生きていかなければならなかった。異議を唱えるものは誰もいなかった。

そうした震災の第一ステージに対して、いまはどういった局面となったのか。

「現実」に向き合う

まず、大震災の記憶の風化が石巻の外で起きている。それに対して石巻の内部で

は、本格復興へのプロセスの渦中でより一層厳しさを増している。このギャップがどんどん拡大している。

マスメディアの取上げ回数も大きく減少した。もともと、震災発生直後から頻りに報道されたのは有名人の炊き出しであった。被災地にとってはありがたいことだったが、そのニュースに偏りすぎた。また一部ではあるが、実態からかけ離れた、復興ミニバブルが被災地で出現しているという記事さえ出てきた。メディア情報が大きく減少するなかで、石巻以外の地域に誤ったイメージを流すことにもなりかねない。

全国からの支援の声も海外からの支援も、ボランティアも大きく減少した。国、県、市の行政のスピードは依然として上がらな

い。未曾有の災害ならば、それに対応するには、従来とはまったく異なった大胆な措置をとらなければならぬ。しかし、従前どおりの対応に終始する結果、事態はますます紛糾し、行き詰まり、課題が解決されずに、まさにガレキの山のよう蓄積していく。

全壊、半壊した宅地の買い上げ、建て替え用地の確保、法的規制、二重ローン解消なども進まず、復興に向けての再出発の足場が決まらぬ不安定な状況なかで、被災者はイライラの頂点にある。

仮設住宅は二年の期限付きである。いずれ出て行かなければならない。そうなれば、家を建てるか、賃貸住宅に引っ越さなければならぬ。仮設では無料だったが、ローンか、家賃を払

わなければならない。そのため収入確保を図らなければならない。

しかし、安定雇用確保もまったく先が見えない。震災直後の休業による一時解雇は続いたままである。仕事なら何でも良いという訳ではない。慣れた仕事、将来に亘って継続できる仕事に就きたい。石巻は水産業の街だが、魚市場の再建など、まだ時間がかかるようだ。結果、これまで石巻に水揚げされてきた水産物が他県の漁港にすら替えるケースも増えている。これでは、いまも将来も不安で仕方がない。

これらに加えて、被災支援のための措置が、時間経過とともに解除される時期が迫ってきている。その一方で、インフラの整備工事は遅々として進まない。

他方では被災者は、いつまでも支援を受ける立場に居続けることにも我慢が出来なくなってきた。完全な自立をなるべく早く確立したいという思いが日増しに強くなっている。

こうして、震災直後の応急支援体制が徐々に終了し、第二ステージに移行する過渡期に移り、否が応でも厳しい「現実」に直面せざるを得ないという大きな流れが被災者に押し寄せってきているのだ。

利害の対立

第一ステージでは方向性が一致していた被災者は、



「JR 石巻」

のか、被災者は語りたがらないが、最悪の状況を迎えることになるという恐怖感にはヒシヒシと伝わってくる。

悲観の渦からの脱出

どう考えても八方ふさがりのように写る。石巻が直面している「現実」を突破する方法は本当にあるのか。軽々しく論じることなどもつてのほかではある。残念ながら筆者にも具体的な妙案があるわけではない。

あくまで部外者、第三者の立場から言うことは、具体的な策を考える前に、この厳しい「現実」に立ち向かう石巻の姿勢をあらためて検討してみようかと言うことである。

まず、未曾有の災害からの復興には、従来の手法は通じない、まったく新しい手法を見出す以外にないという覚悟を決めることを提案したい。この大震災発生前までの高度に組織化、管理化された日本というものの大前提は、このような大きな災害は想定していないのだ。したがって、いまの体制から有効な対応策を引き出すことは基本的にはむずかしい。新たな発想とともに立ち上がる以外にないと思う。

したがって、復興の諸条件が万全といえる状況になる可能性は低いと言わざるを得ず、整うまで待つというの賢明な策とはいえない。限られた条件のもとでも前進する勇気をもって状況を打開していくほかはないと考える。

こうした状況下では必ず勇氣ある挑戦者が出現するものだ。その勇氣に鼓舞され、またその姿勢に学ぶことも必要だ。やってみて成功するかどうかの保証はないが、挑戦せず傍観するだけでは成功確率はゼロのまま。そうした挑戦者たちの試行錯誤の積み重ねで、この困難な事態が切り拓かれていくと信じていることだ。

他方、課題の山に押し潰されないことである。その課題の山を見ているだけで前進する意欲がそがれるのが常だ。であれば、目を転じて、出来る限り良い兆候のみ見ていけば身体奥底から力が湧いてくるのではないかと思うのだ。

最後に、何としても「第二の被災」は回避して、後世「石巻の奇跡」と称されるような復興を実現していただきたい。



「未来へ一歩 石巻 希望の息吹 石巻」

当新聞の提言―「石巻水産業復興ビジョン(案)」

1. 漁業生産者低年齢化促進―平均年齢40歳代に引下げ
 昨年の国内漁業就業者数は約21万人、平均年齢56.2歳(平成20年)
2. 生産近代化急務
 - ① 生産設備の個人所有から集団所有へ(老朽化対応と借金運営対策)
 - ② 海外生産手法、養殖技術の早期導入(海外の手法の学習)
3. 水産物の「地産地消転換」のための流通大改革
 - ① 水産物素材供給基地から「消費地」への脱皮
 - ② 水産物の「高付加価値化」促進で、雇用拡大
 - ③ 生産者・流通業者・観光業者等のコラボレーション拡大
 - ④ 中央市場への中継基地ではない「新・魚市場」の創設
 - ⑤ 国内だけでなく、海外へも積極的にPR
4. 水産資源の再発掘
 - ① シーフード料理コンテストの実施(新たな料理の開発)
 - ② 大量供給ルートに乗らずに廃棄されてきた「水産資源」の再発掘
 - ③ 三陸の水産以外の食材とのコラボレーション

提言―「石巻水産業復興ビジョン」

震災前の状態を回復するだけで将来の展望を拓くのはかなりむずかしい。これから何年もかかって、かつての問題山積であった石巻の水産業の状況に戻すことの意味は何か。震災前のそうした課題を数年後に再度引きずり出し、解決という出口の見えない状況に関係者が再度直面するために復旧・復興の努力をするのは理屈に合わない。

これからの水産業の復旧・復興にあたって、筆舌に尽くしがたい苦労は目に見えてある。同じ苦労をするのであれば、将来に夢が持てる、明るい展望が開ける苦労を

すべきではないか。水産業に詳しくないもの「たわごと」といわれるかもしれないが、あえて石巻の水産業復興に向けての提言をさせていただきます。

なお、この問題を考えるとき、石巻の水産業復興について、昨年度水産庁の官僚がまとめた資料があるので、全体像を把握するのに役立っていただければと思う。

<http://www.sanniku-pj.org/document>

(注:資料は、「三陸海産再生プロジェクト」がそのHPに記載することを許可された関係上、間接的な紹介となっております)

心でつながる復興

自らも被災者であり、自宅は全壊、九死に一生を得た。勤務していた、あの流された巨大缶詰の水産物の社屋も倒壊し、工場も全壊、いまは仮設事務所で営業している。とにかく一刻も早く事務所や工場の再建を実現しようと奮闘中である。

それだけでも大変であるが、その上に「三陸海産再生プロジェクト」という被災した漁業者を支援する活動の広報室長も兼務する。



流された巨大缶詰



仮事務所



三陸海産再生プロジェクト広報室長兼(株)木の屋石巻水産社員の
中村暢宏氏

いわば、被災者が被災者を支援するプロジェクトであり、会社を挙げて取り組んでいるプロジェクトである。本来の勤務の傍ら、広報室長として講演活動やネットでの情報発信、メディア対応あるいは遠方からのさまざまな来訪者の被災地案内もしておられる。

取材当日の六月三〇日はたまたま、流された巨大缶詰の解体日だった。この解体によって震災の風化を懸念する向きもあるが、中村氏は缶詰の解体によって風化するのではなく、伝えていく努力が途絶えたときに風化するのであり、風化はさせないと力強く述べられた。

この七月五日には勤務する会社の魚町本社工場と美里町工場の地鎮祭があり、会社再建に向けて新たな一歩を踏み出した。その日がちょうどご本人の誕生日であり、忘れられない日となるだろう。

今度の震災体験から、中村さんは、利益優先ではなく、たくさんの心でつながる復興を目指したいと静かな口調で言う。企業は利益追求が最優先するという常識と想われてきた論理とは異なる。

震災直後に避難所を転々としていたときに、ラジオから流れてきた被災者支援の声、秩序正しく順番を待つ避難者の姿、九日ぶりに助け出された祖母と孫の姿と声、全国から寄せられた応援の声と支援物資。それらを聞いて、見て、多くの人の心で生かされていると感じた。それ以降も、多くの心に触れたという。

復興へのチャレンジャーたち

石巻を

観光スポットに

『石巻まちなか復興マルシェ』とは、今年六月九日にオープンした仮設の商店街である。鮮魚・魚介製品販売店や生鮮野菜販売店など六店舗が出店している。いずれもこの大震災で被災した商店の出店である。平日でも多くの訪問者でいっぱい、地元で収穫された水産物や野菜を購入し、あ



石巻まちなか復興マルシェ
木村均氏

るいはご当地B級グルメの「石巻焼きそば」や地元産の水産物をたっぷり載せた海鮮どんぶりなどを食べて行く。また、商店街にはイベント会場もあり、土日の予定は先まですばいばいということである。

この仮設商店街のとりまどめをされている木村均氏は、他にも石巻市のTMOである「街づくりまんぼう」やB級ご当地グルメの「石巻茶色い焼きそばアカデミー」の事務局も担当され、さらには被災者を元気づける石巻市の有志で立ち上げた市民劇団「夢まき座」の創設仕掛人でもあるというさまざまな顔を持つ。

仮設ということでは原則二年間の期限付きの開設であり、いずれ閉鎖となる予定だが、木村氏は、閉鎖して終了するということではなく、ここを観光スポットとして、すぐ近くにある石ノ森美術館と連携しつつ、拡大発展させる構想を企画中という。

そして、いつまでも支援を受けるという立場ではなく、自立した観光事業の拠点にしていかなければなら

らないと力説する。そうした意味で、いままさに正念場を迎えているというお話が印象に残った。

夏に養殖牡蠣を食べる

岩牡蠣ではなく、養殖の真牡蠣を夏に食べられると聞けば、牡蠣は冬の「R」のつく月しか食べられないはずと驚くだろう。それは昔の話で、夏に市場に出ないのは流通側の都合だとかき小屋渡波の寺岡店長さんに教えられた。殻つき牡蠣をこの季節に提供できる秘密は、一旦収穫した牡蠣を雄勝の深い冷たい海に沈めておくのだという。取材でおじゃましたのは七月一日だった。焼き上がった



焼き上がった牡蠣

水産業の街であり、同時に観光の街でもあるという夢のある構想をぜひ実現してもらいたいと思う。

た殻つき牡蠣を専用のナイフで剥いて、プリプリと太った牡蠣を生ビールとともに食す。おいしかった。牡蠣以外の水産物もある。ここを運営する(株)アイリンクの齋藤社長は、創刊号でも、この第二号でも記事がある。筆者は勝手に『養殖牡蠣ビジネス変革仕掛人』と名付けている水産業復興の勇気ある挑戦者である。

<http://kakigoya.jp/>
(かき小屋HP)

店長さんとスタッフ



医療体制も被災した石巻

被災で医療機関減少
犠牲となった医師たち
膨大な患者数
不足する薬剤
今後も増える患者



日赤医療チーム及び
こころのケアチーム連携



宮城クリニック宮城秀晃氏

この大震災で石巻管内の医療機関は別紙のように被災で大きく減少した。建物の損壊による閉院、あるいは医師、医療スタッフが津波の犠牲となったための閉院である。現に当クリニックも津波被害を受け、院内は惨憺たる状況となったが、家族やスタッフで医療

医療機関

石巻市立病院	150床→閉院
(仮診 外来診療所のみ)	
雄勝病院	40床→閉院
女川病院	100床→外来のみ
恵愛病院(精神科)	120床→閉院
産婦人科	2病院→閉院
内科	5診療所→閉院
眼科	1診療所→閉院
精神科	1診療所→閉院
市立急患センター	準備中

医療機関の減少

機関としての機能を十日後には回復し医療活動を再開した。

同時に、当クリニックは多少土盛りしていたので、一旦は水没したが水が引いたあとは使用可能となったため、水没したままの周辺家屋からの避難民、あるいは逃げ遅れて柱や金網にしがみついた難を逃れた住民の緊急避難所ともなった。

このような医療機関の大幅減少に対し、震災による怪我、病気、通院中の患者などが残った医療機関に集中する結果となった。医師、医療スタッフ不足は深刻で大きな支障が出た。特に精神科は一軒しか機能していません。ほとんど日赤はじめボランティアの緊急応援隊が駆けつけ、地元の一部医療機関と連携して対応



みやくり市場

市内中心部では、不十分ながらも緊急医療体制が整ったが石巻は広い。特に牡鹿半島は来院したくとも交通インフラが壊滅し、車もほとんどない状態で、高齢者は治療のための通院が出来ない状態が続いた。そこで「震災こころのケア・ネットワークみやぎ」を立上



日精診移動診察室

からこころステーションの場所

石巻市銭場3-19
秋田屋ビル1F
電話・FAX 0225-94-2966
からこころ相談電話 0120-322-016
(毎日10時から16時まで)
ホームページ: karakorostation.jp

からこころステーションの案内

「一般社団法人震災こころのケア・ネットワークみやぎ」から寄付のお願い



詳細は
電子版トップページより
PDF ファイルを
ご参照下さい



からこころステーションスタッフ

これまででは考えられないとまもなく目の前の現実に対応してきた。今後もきびしい状況は続くであろう。進んでいくしかない。最後に、全国から集まった多くの医療ボランティアのみならず、支援物資を送ってくださった皆さんに、この紙面をお借りして謝意を表したいと思います。

また、全国からの支援物資が山のように臨時診療所に届けられたが、診療に一杯で物資配給に手が回らない。そこで当クリニックが有志とその任務を引き受けた。配給場所でも何と言わなくても静かに整然と並ぶ被災者には感動を覚えた。

また、臨時診療所に分配された物資が山のように臨時診療所に届けられたが、診療に一杯で物資配給に手が回らない。そこで当クリニックが有志とその任務を引き受けた。配給場所でも何と言わなくても静かに整然と並ぶ被災者には感動を覚えた。

あきらめず前を向いて

大震災の「現実」に直面する被災者へのエール

この震災で社屋が被災し、新聞が発行できなくなったため、手書きの壁新聞を街に貼りだしたことで有名になった石巻日日新聞・武内宏之常務取締役取材させていただき、この一年三ヶ月を振り返り、またこの先どういった状況となるのかについてお聞きした。



石巻日日新聞常務取締役
武内宏之氏

この一年三ヶ月の石巻は、何が起こったのかじっくり考えることもままならず、目の前に突きつけられた壮絶な日々の生活に追われ続け、きたという印象だ。

震災前まで新聞を配布していた地域では、死者約五千名と行方不明者約千名、合わせて約六千名という犠牲者を出してしまっただけで、これほど大量の人々が三・一一を境に、突然それまでの生活を一瞬のうちで断たれたことであり、残された家族も、三・一一を境に生活が一変した。あまりにもむごいことであった。

それが時間とともに癒されていくかと思いきや、さらに、これから本格的な「震災の現実」に直面せざるを得ない状況に追い込まれるという。あのショックングな津波の破壊にも匹敵する「第一の震災」である。

行政と被災者・被災地とのほざまで

宮城県石巻・牡鹿選挙区選出の池田憲彦県議員に、震災発生からこれまでの一年三ヶ月の状況、及び今後の展開についてお聞きした。石巻・牡鹿地区は最大の津波犠牲者を出した地区であり、被災者・被災地と硬直化した行政とのほざまで苦しむ政治家の姿はある程度予想された。しかし実際はそれをほかに越えるものであった。



宮城県議会議員
池田憲彦氏

震災発生直後からしばらくは被災地各地への物資のピストン輸送を毎日行っていた。各被災地で不足しているものを聞き、届けるという御用聞きに徹した。震災直後の被災地の様子はとも言う葉では言い表せない。

被災地の現場ではいまださまざまな問題が噴出していて、ひとつ解決すると二つ、三つと新たな問題が出現するという状況が続いている。収束に向かう気配は見えない。むしろどんどん拡大している感じがある。

また、あれだけの震災で行政もパニックに見舞われた。加えて従来の対応ではとても収束できるような事態ではないことも問題の拡大につながっている。

石巻・牡鹿地区は面積も広く、置かれている状況も地区ごとに異なる。その状況に対し、すべての地区の一律処理には無理がある。

宮城県の石巻・牡鹿選挙区選出の池田憲彦県議員に、震災発生からこれまでの一年三ヶ月の状況、及び今後の展開についてお聞きした。石巻・牡鹿地区は最大の津波犠牲者を出した地区であり、被災者・被災地と硬直化した行政とのほざまで苦しむ政治家の姿はある程度予想された。しかし実際はそれをほかに越えるものであった。

また、あれだけの震災で行政もパニックに見舞われた。加えて従来の対応ではとても収束できるような事態ではないことも問題の拡大につながっている。

石巻・牡鹿地区は面積も広く、置かれている状況も地区ごとに異なる。その状況に対し、すべての地区の一律処理には無理がある。

マスメディア報道と今回の取材について

複数の取材先で言われたことで強く印象に残ったことがある。

ある取材先では、本当は取材を断ろうと思ったが、最近立ち上げたミニ新聞というところから受けた、と。震災直後の多数のマスメディア取材で自分の立ち位置に混乱が生じたため、いまは一切受けていないとのことだった。開口一番のこの発言にいきなり緊張した。

また別の先では、素のままの被災地・石巻を伝えて欲しいと、静かではあるが、強い口調で言われた。東北・石巻の人も表現が極めて控えめである。それらの言葉から汲み取れるのは、マスメディア報道に対する違和感の表明である。

マスメディアは正しく被災地・石巻を伝えてきたのか。報道によって作られるイメージと実態がねじれを起こしてきているのではないかと、筆者の技量不足はなんとも致し方ないが、少なくとも正確な情報と、正確な実体を伝えなければならぬと非常に緊張した。

その結果については、石巻の方々及び当新聞の読者の方々のご批判を待つしかないが、報道というものの影響力と重みをずしりと感じた紙面づくりであった。

その結果については、石巻の方々及び当新聞の読者の方々のご批判を待つしかないが、報道というものの影響力と重みをずしりと感じた紙面づくりであった。



参議院議員 小野慎司氏

1968年	6月16日(昭和43年)生まれ。
1987年	会津高等学校卒業(第39回)
1989年	衆議院議員 新井将敬 学生スタッフ
1992年	専修大学法学部卒業
1992年	衆議院議員 新井将敬 秘書
1993年	衆議院議員 斎藤文昭 秘書
1999年	会津若松市議会議員当選(初)
2003年	福島県議会議員当選(初)
2007年	福島県議会議員当選(2期)
2009年	みんなの党入党
2010年	参議院議員当選(初)

参議院議員 みんなの党

小野慎司議員に聞く

政府の決断放棄、先延ばしは許されぬ！
福島はいますぐ、良くても五〇点しか取れないきびしい政治決断で状況を打開するしかない

◇

新聞が『東北復興』を名乗る以上、福島県を例外扱いにするのは矛盾である。また、取上げるなら、中途半端な切り込みで、報道済みの情報を適当に並べても意味がない。

いったい、福島の現状についてさまざまな断片的情報が飛び交っているが、その実体はどうか。マスメディアが提供する情報は正確に福島の実状を反映しているのか。それを確かめ

東北の政治家

東北の政治家たちから「東北の復興」について聞く連載コーナー。なかなか進まぬ復旧・復興を眼前にした東北の政治家がいま何を考え、どう行動している

福島県民、沿岸部からの避難者の姿、この苦しく、きびしい状況を何とかしようともがき苦しむ政治家の姿が想像できるだろう。

― 福島の現状は？

宮城や岩手とは実情が違った。震災発生約一〇日後に明確に分かった。他県では被害の調査がすぐ開始されたが、福島は第一原発二〇キロ圏内では立入禁止で家にも戻れない、犠牲者の捜索も出来ず、当然ガレキの片付けもできない状況が長く続いた。原発もどうなるか分からない状態だった。

― 他県でのガレキ処理問題

も、宮城や岩手の話で、福島は県内処理。他県でのガレキ処理は全体の二割程度で止まっているが、福島は前進するどころか依然としてゼロとか、あるいは悪化している部分もある。

― また、福島をひとくくり

に論じることはできない。浜通り、中通り、会津と区分され、それぞれ別の実状を抱える。地域別の対応が求められている。

― 現在の沿岸部からの避難者の気持ちはどうか

― 昨年夏、二〇キロ圏内、警戒区域の市町村に、みんなの党で作成した、汚染地域の土地の買上げ及び長期借上げ法案を説明しに回ったが、どこでもとても冷たい対応だった。戻ろうとしているのに、戻るといのか、町を破壊する気か、と

うかどうかだ。時間はもうない。延ばせば延ばすだけ、状況は悪化するだけ。来年三月でもう二年を迎える。真つ二つに割れた。

― 除染は可能か。除染後は戻れるのか。

― 除染については、一二年でできるというのは信じ難い。政府が一〇〇年も二〇〇年もかけ、かつ二兆円も二兆円もかけ、家屋のみならず、森林まで含めて徹底除染を

― 除染で除去した大量の土、ガレキ処理問題

もある。また、徹底除染をやるといふなら、長期借上げもあるが、出来ない、やらないうことならば、土地買上げということになる。

― また、除染できて戻らないというアンケート結果

も若年層で多く見られた。― 政府決断次第か

― 避難地区の市町村長に、この状況下で、戻る、戻らないの決断を迫るのはあまりにも酷だ。首長には元の場所に戻り、かつての街を再建するという選択肢しかない。結局政府決断しかない。除染もしかり。一〇〇

― 東電の補償については、明確な因果関係のあるものに限定するといっているが、明確な因果関係とは何か。風評被害も含めたら補償の範囲を遥かに超えている。

― 脱原発依存について

電力の地産地消を検討すべき。大都市と地方の電力生産手法は違っている。小型水力発電も、太陽電池も、地熱発電も、波の力を利用した波力発電もさまざまな。脱原発は可能だ。しかし、例えば、小型水力発電の場合、農業用水ならばその管轄は農水省、川ならば国土交通省など水利権をめぐる各官庁の権限が入り乱れるような問題もある。

― 風評被害について

福島ということでも何もかも売れない。放射能数値を発表すれば売れない。しかし、数値は正確に発表しなければならぬ。会津は汚染地区ではないのに売れない。要するに、放射能に関する知識が不足している。過敏になり過ぎている。

― 放射能汚染はすべて福島由来と決めつけている？

― 他県で高濃度汚染が発表されることがあるが、みな福島由来かどうか分からない。ムードとしてみなそう思っている。正確な調査が必要ではないか。実際に他県の調査などもやってみたらどうかと思つてくる。

― また放射能のみに過度に

― 会津の復興は人づくりでもある。それをやるべきか。また復興は人づくりでもある。それをやるべきか。また復興は人づくりでもある。それをやるべきか。

― 会津藩旗

― 以下は、今般の取材を通じて記者に強烈かつ痛切に聞こえてきた

― 二〇キロ圏内避難民の声なき声である

会津の人は自らを「会津人」と称するほど誇りを持っている。戊辰戦争は忘れていないし、それ以後の苦しい歴史も忘れていない。ずっと言い訳せず、耐え忍んできた。今回も耐え忍んでいくだろう。来年のNHK大河ドラマの主人公は新島八重だが会津人と当時の状況がよく分かることだろう。

― 東北の復興について

― 地域主権型道州制は進めべき。地方が主で、中央が従という意識革命も必要。

― 反消費増税が旗印。い

― 長時間の対応ありがどう

― 地方へ移管というのが方針

― 国政選挙に近い

― 反消費増税が旗印。い

― 長時間の対応ありがどう

― 地方へ移管というのが方針



会津藩旗

― 以下は、今般の取材を通じて記者に強烈かつ痛切に聞こえてきた

― 二〇キロ圏内避難民の声なき声である

会津の人は自らを「会津人」と称するほど誇りを持っている。戊辰戦争は忘れていないし、それ以後の苦しい歴史も忘れていない。ずっと言い訳せず、耐え忍んできた。今回も耐え忍んでいくだろう。来年のNHK大河ドラマの主人公は新島八重だが会津人と当時の状況がよく分かることだろう。

― 東北の復興について

― 地域主権型道州制は進めべき。地方が主で、中央が従という意識革命も必要。

― 反消費増税が旗印。い

― 長時間の対応ありがどう

― 地方へ移管というのが方針

― 国政選挙に近い

― 反消費増税が旗印。い

― 長時間の対応ありがどう

― 地方へ移管というのが方針

― 国政選挙に近い

平泉を草創した藤原清衡の願いとは

世界遺産となった平泉の意味するところとは

前回、「東北独立」を掲げて東北が一つとなること、東北がひとつになった暁には平泉こそがその中心地にならねば、というところを書いた。今回はこの平泉について考えてみたい。

ある。中尊寺を建立した奥州藤原氏初代の清衡は中尊寺を建立し、二代基衡は毛越寺を建立し、三代秀衡は毛越寺を完成させ、無量光院を建立した。中尊寺の金色堂、毛越寺の浄土庭園、無量光院越しに金鶏山山頂に沈む夕陽、いずれも浄土を表している。

奥州藤原氏が三代揃って浄土を表す寺院を建立した、その意味するところは何か。そうした寺院を建立することで自身の来世の極楽往生を願ったのだろうか。それとも、浄土はこういうものだということを示す「テーマパーク」のようなものを作りたかったのだろうか。

世界文化遺産に登録された平泉の六つの構成遺産については、「現世における仏国土(浄土)の空間的な表現を目的として創造された独特の事例である」と説明されている。簡潔かつ的確な表現である。しかし、

今に残る構成遺産は、ただ単に「浄土とはこのようなものである」ということを表現しようとしたのにとどまらず、奥州藤原氏は初代の清衡以降、この東北の地をそのまま浄土としたいと考えた。その祈りが込められたものこそが、今回世界遺産に登録された建築・庭園・遺跡なのである。

「中尊寺建立供養願文」が語ること

当時の平泉は「平和」と「平等」の理念を持つており、それは世界各地で戦乱の絶えない現代にも誇れるものだった、と地元では胸を張る。なぜそのようなことが言えるのか。その根拠は今に残された「中尊寺建立供養願文」である。その中では、清衡がなぜ中尊寺を建立しようとしたか、その思いが余すところなく語られている。

特に印象的なのは「二階の鐘楼一字」について書かれたくだりである。この鐘楼には大きな鐘が懸けられた。その鐘について供養願文では、「この鐘の音はどこまでも響いていて苦しみを抜いて安楽を与える。それはあまねく皆平等である。官軍の兵と蝦夷の兵が戦で命を落としたことは、昔から今に至るまで幾多のことであった。獣や鳥や魚や貝が人に殺されることも過去から今まで数え切れな

い。それらの魂はあの世に去ってしまったが、その骨は朽ち、今もなおこの世の塵となつて居る。鐘の音がこの地を揺り動かす度に、心ならずも命を奪われてしまった者たちの霊を浄土に導かせよう」と書いている。

ここに清衡の思いが集約されている。敵味方を問わない。それどころか、人であるか人でないかすら問わない。とにかく、自らの生を全うできなかったあらゆる生き物の魂を皆平等に浄土に導きたい、そう言っているのである。なんと壮大な願いであろうか。

中尊寺、奥大道、村々に置かれた寺院の意味

そして、それが虚言空語に終わらなかつたところが清衡のすごいところである。しかも、清衡の願いは、死んだ者を浄土に導くことだけにとどまらなかつた。東北の地に今生きている者をも浄土に導こうとしたのである。清衡は東北の南端の白河の関(現在の福島県白河市)から北端の外ヶ浜(現在の青森県青森市)まで「奥大道(おくだいどう)」という「幹線道路」を整備した。そのちょうど中間に中尊寺をつくった。その奥大道には、約100mおきに阿弥陀如来が金で描かれた傘卒塔婆を立てたと伝えられる。また、清衡の影響下にあった奥羽の一万余りの村にはそれぞれ寺院を置いた。

余談だが、この「奥大道」という名称。なぜ「大」という名称がついているのだろうか。現代に住む我々は、ただ単に道幅の大きな幹線道路だったからだろうかとか考えない。しかし、ならば同じように「幹線道路」であった東海道や東山道も同じように「大」がついてはいる。奥大道のこの「大」は、仏教で「人智を超えた偉大な」という意味の「摩訶(まか)」と同義だという(摩訶不思議の「摩訶」である)。「摩訶」はサンスクリット語の「maha」の音に漢字を当てたもので、「maha」は漢訳では他に「大」「多」「勝」の字も当てられる。従って、「奥大道」は「みちのくの偉大な仏の加護に守

られた道」という意味なのである。さて、これらはいったい何のためのものだったか。それは、この東北の地が仏の加護の下にあることを、この地に住む人々に伝えたいからである。東北の地は古くから戦乱に明け暮れた。しかも、それは東北の地に住む者が望んで起こしたものでなく、いつも中央からの「侵略」に対する抵抗という形であった。故に命を落とす理不尽、それがこの地に住む者にとって過酷な現実であった。

「この世の浄土」実現への清衡の取り組み

清衡自身も過酷な前半生を送っている。幼い頃に前九年の役で父親を殺され、母親は父親を殺した敵方である清原武貞に嫁がされた。その後起こった後三年の役では、母親がその武貞との間に産んだ異父兄弟家衡に自分の妻子を皆殺しにされた。自らの手でその家衡を討った。戦乱がもたらす無残さを身を以て嫌というほど味わわされたのが、他でもない清衡その人だったのである。

清衡はだからこそ、過去から今に至るまで、そのようにたくさんの人が命を落とすことこの東北の地を、丸ごと浄土にしようと考えた。浄土は来世にあるのではなく、この世から来世まで続いているものだということが、清衡は伝えたかったのである。その清衡の意図を今に伝えるものが、平泉の文化遺産なのである。

清衡は、平泉に中尊寺を建立し、村々に寺院を建立してこの東北の地が浄土であることを示す一方で、東北が戦乱に巻き込まれない浄土とするための政治工作を中央に対して行った。当時の関白藤原師実の子、師通の日記に「清衡が初めて関白師実に馬を献上した」との記述がある。当時、みちのくの馬は名馬として殊の外珍重された。馬だけではなく砂金も献上したと見られる。清衡からの貢物によって中央では、そのように労せずして欲しいものが手に入るのであれば、わざ

わざ大きな犠牲を払って戦をしなくてもよいのではなにか、というように意識が変わっていったのだろう。結果として、清衡はその後もおよそ100年に亘って中央から攻められることのない、平和な東北を実現したのである。

今だからこそ受け止めた清衡の願いとメッセージ

阿弥陀如来のいる極楽浄土は、この地から十億億土を隔てた西の果てにあるという。であるならば、極楽浄土というのはなんと遠いところにあるものだろうか。しかし、清衡の伝えたかったことは、そうではなく、「浄土」というのは今ここにあるのだ」ということである。自分たちのいるこ

の場所が浄土とは、なかなか実感できないことではある。しかし、我々の目に最も近いところにありながら見えないまつ毛のように、浄土も私たちのすぐそばにありながら見えにくいもの、と考えることはできないだろうか。

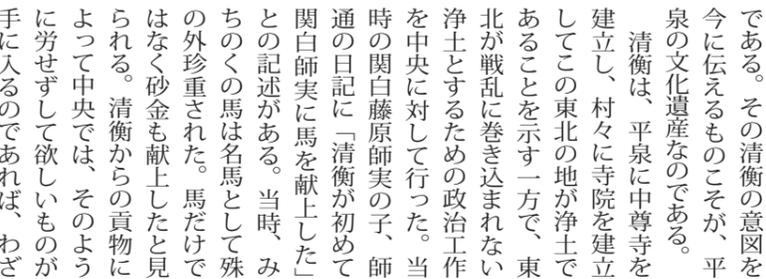
そのことを伝えるために中尊寺はつくられ、清衡の遺志を継いだ基衡、秀衡によって毛越寺も無量光院もつくられた。「多くの人が亡くなった東北の地をそのまま浄土とする」という清衡の願いを、そして「我々の住むこの地こそが浄土である」という清衡のメッセージを、先の大震災で大きな痛みを受けた今だからこそ、もう一度東北に住む我々は心して受け止めたと思うのである。

Face book
https://www.facebook.com/kouhei.otomoto

大友浩平氏
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



二代基衡の妻が建立したという観自在王院の浄土庭園



無量光院跡、中央遠くに見えるのが金鶏山

『仙臺宣言』

仙台、という町に住み始め、六年目になる。

隣の山形県の日本海側に生まれ育ち、札幌に二年、東京に十年以上住んで、各地を放浪しながら最終的に仙台を選んだ次第。流れ者気質の一種か、自分の住む場所についてあれこれ考える癖がついているが、仙台は自ら選び抜いた町という以上に想像を超える様々な出会いや出来事(そして苦勞、笑)に彩られて思い入れがあり、今も自分が暮らす場所としてはベストの選択だと思っ

ている。昨年の大震災の中心部であり、今後ともそうなり得るとしてもである。

今回はスコットランドを東北の今後のためのひとつの道標にすべき、との主旨で寄稿

前回スコットランドを東北の今後のためのひとつの道標にすべき、との主旨で寄稿

今回はスコットランドを東北の今後のためのひとつの道標にすべき、との主旨で寄稿



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

現代は自然と人間の関わり、伝統の芸能・精神文化などの視点が直視されており、それらはむしろ仙台以外の東北各地が本場であり、勝つて、あくまで二市民的思想として想いを綴ってみたい。

仙台に移り住む前後、思ったのは随分この町を「悪く言う」人が多いなあ、という事だ。個性のない、つまらない町。排他的で、出る釘は打たれる。東北一を自慢し、東北他県を見下す一方で

東京・中央には媚びへつらう。雇用が最悪で、「おわつてい

る」。実際は緑もそれほどない。などなど・移住を躊躇してしまっただけ、一方で

は「仙台は全てが面白い」「仙台学」創刊号「JTB清水慎一氏」と言い切る人もいる。

この両極端さ、実に興味深い町ではないか。

仙台については、最近いろいろ本が出ていますが、まだまだどれも語り足りないように思う。

例えば私のような「東北他県人」にとつて、この宮城・仙台がどういう所であるかと、よく考える事がある。それは、「東北の中の仙台」について考える事であり、

もともとこの地に住んできた人々にとつてはあまり関心の

ない事なのかも知れない。

仙台が東北で一番、という根拠は、ひとつ都市が大きく立派だ、という点に尽きると思う。それは高度経済成長期のような、都市の発展こそが至上とする価値観の上では大きな自慢だが、

現代は自然と人間の関わり、伝統の芸能・精神文化などの視点が直視されており、それらはむしろ仙台以外の東北各地が本場であり、勝つて、あくまで二市民的思想として想いを綴ってみたい。

仙台に移り住む前後、思ったのは随分この町を「悪く言う」人が多いなあ、という事だ。個性のない、つまらない町。排他的で、出る釘は打たれる。東北一を自慢し、東北他県を見下す一方で

東京・中央には媚びへつらう。雇用が最悪で、「おわつてい

る」。実際は緑もそれほどない。などなど・移住を躊躇してしまっただけ、一方で

は「仙台は全てが面白い」「仙台学」創刊号「JTB清水慎一氏」と言い切る人もいる。

この両極端さ、実に興味深い町ではないか。

仙台については、最近いろいろ本が出ていますが、まだまだどれも語り足りないように思う。

例えば私のような「東北他県人」にとつて、この宮城・仙台がどういう所であるかと、よく考える事がある。それは、「東北の中の仙台」について考える事であり、

もともとこの地に住んできた人々にとつてはあまり関心の

ない事なのかも知れない。

あくまで都市とはステージに過ぎないのではないかと、と

いう事だ。東北における大都市が、東京とは全く違う形の「首都」になり得るのではないかと、という可能性

つまりは仙台の持つ「力」の前に他が屈するのではなく、逆に東北各地がその「力」

を利用して、そのために東北全体が仙台を変えていく、という発想の転換である。

仙台は東京ばかり見ている、と批判されがちだが、私はむしろ、仙台が東京を

意識する事は宿命的であるし、間違っていないと思う。ただし、今後はいかに東京

と違う道を行くか、を頭にに入れていなければならない。

東京と仙台の違いとは何か。東京は、全国各地の人材・技術・資金を集めて膨

れ上がる。集まったものはなかなか外へ出て行かず、地方は搾取されたまま瘦せ細

っていく。これに対して仙台には、日々東北各地から高

速バスが乗り入れて人々が集まるが、彼らはまた、帰

っていく。決して各地の人や物を中に閉じ込めず、交流

させては循環させる。この言

わば、東北の中の心臓のような機能こそが、東京には

ない、風通しの良さを持つ仙

台の役割ではないだろうか。今はまだ各地が「仙台に客

を取られて困る」という状況かも知れないが、六魂祭

姿を見て、私は新たな展開を予感したのだ。

ここで、仙台に住む私自

身を一例に、東北の町から始

める、という事の楽しさやメリットについて綴ってみた

る。そこでは「多数派民族」であるといえる東北人が誇りを持つ事で、他地域や海外からの移住者たちも堂々とアイデンティティを主張

し、ありのままの勇気を共有できる、と考えるのである。そこが、全て混沌の中で

曖昧にしてしまう東京とは違うところだと思っただけ、それは思い込みだろうか。

私自身が流れ者体質だからなのか、都市への移住者の多くがそうなのか、東京に住んでいた時も、仙台に住む現在も、いかに住みやすい町でもここは仮住まいである、という感覚がある。とは

言え、東京は広過ぎて時間金も金もなければ容易に外へ出られない。東京に住むにはある程度「東京人」になる覚悟が必要だ、とよく思

ったものだ。これに対し仙台に住むのに必要なのは「東北に住む」という覚悟かな

と思う。仙台に閉じこもる必要はなく、かなり気軽に外にある東北の多様な風景

の中に入っていく、極端な事を言えば、町の住人になろうが山の住人になろうが自由

自在だ。各々の生き方を模索し創造していくための

東京とは全く違う形のインスピレーションに満ちている、と思っ

た出来事でもあった。

勿論、東京であれ仙台であれ、各々の可能性があり、不便や苦勞がある。その人がどちらの住人になる覚悟

なら受け入れられるか、というより、どちらなら覚悟

などとも思わずに入っていく

るか、で生きるべき場所は決まってくるのだろう。

少々、理想論というか論理的ですらない話が長過ぎたかも知れない。実際の仙台はあくまで宮城県の県庁

所在地で、行政は県内の事で手一杯かも知れない。地元産業に乏しく、中央資本に

牛耳られ、若者の流出で人材も育たない。「この町はダメだ」と言い切つて離れていく口実は、いくらでも並べ立てられるかも知れない。

東京に住んでいた頃、実際にそう言っている仙台出身者に、何人か出会ったものだ。

私自身、ここまで書いてきて白状するが、震災時は仙台を離れ、ひと月ほど山形の実家に避難した。原発事故の経過を家族がひどく心配した事が大きかったが、

今でも友人に半ば冗談で「逃げたくせよ」と言われる事がある。そんな私に仙台を語る資格があるか、と自問しない事はない。

あの日は、「もう仙台には住めなくなるかも知れない」と心底の心持だった。仮住まい、とは言いがながら、仙台は東北に生きる私にとっての拠点である以上に、単に愛すべき町である。その事に、あらためて気づかされた出来事でもあった。

ここは、原子力という国策に「滅ぼされかけた町」である。私は一日たりとて、その事を忘れた日がない。

昨年末、この仙台で思いがけぬ出会いがあった。以前からたまにインターネット

上で意見交換していた同じ仙台在住の太田浩平氏より

「東北好きで一度集まって飲みませんか」とのお誘いがあり、東京在住の宮城県人や

私のような山形県人も集まって、とにかく東北について何でも語り議論する場が、毎月作られるようになったのだ。今、貴方が目になされて

いる「新聞」も、そこから生まれたものである。市内の喫茶店、おでん屋などの飲食店を舞台とし、月によって地元の政治家などのご参加もあり常に新たな参加者

論客を求めている。かつて人々が集まり論じ合い、世を動かしていったパリのカフェのような光景が、仙台の街の片隅に生まれつつある、と言えようか。

このような集まりが、東北の他の県どこかでも始まっているのだろうか。東北人が大勢出て行っている東京圏にも、既に存在するのだろうか。

もしそうならば、素晴らしい事だ。私はそんな人々と繋がっていきたく、と思っ

しかしもしまだ他にないのなら、やはり仙台は「はじまりの場所」なのかも知れない。「仙台は全てが面白いですよ」。呆氣にとられたあの一言が、実感を帯びて心に響いてくるのである。

仙台に集え。そして散らばり、各々の中心から、動き出せ。

今こそ、東北として立ち

照れくさくも、私はこれから、呼びかけたいと思う。



齋藤浩昭氏

プロフィール
(株) アイリンク代表
宮城県角田市出身
一九六四年生まれ
角田高校卒、岩手大中退
一九九二年コンビ二で独立
二〇〇〇年アイリンク創業

海外マーケットへ進出して真の三陸復興へ

フランス式の

牡蠣養殖を行う

「株式会社和がき」 誕生

私は昨年の大震災・大津波で壊滅した三陸の牡蠣養殖に対し、「三陸牡蠣復興支援プロジェクト」を立ち上げ、前払い予約注文の形を取るオーナー制度を利用して三陸牡蠣の復旧・復興のための資材提供を行ってまいりました。二万人以上のお申し込みをいただいたお陰で、三百四十名以上の牡蠣生産者に仕事をするための資材を提供でき、三陸の主な浜では養殖が再開できたことは本当に良かったと思います。ありがとうございます。

しかし試練は続くもので、昨年初、牡蠣生産者にとって、せっかく養殖再開

「東北の企業家」

東北の企業家たちがいま何を考え、どう行動しているかを取上げる連載コーナー

二〇〇二年、海鮮直送 旨い！牡蠣屋オーブン
二〇〇四年、グリーンシート 株式会社銘柄指定
二〇一二年二月、かき小屋「渡波」開店、四月、同「仙台港」開店

生産者を集め、フランス式養殖やオーストラリアの養殖をスライドを通して紹介しました。海外の養殖方法を参考に付加価値の高い牡蠣養殖を考えてみようと呼びかけたのです。

その結果、気運が盛り上がり、フランス式養殖など海外の養殖方法を参考にしながら、付加価値の高い牡蠣養殖を行い販売すること、日本で初めての天然採苗のシングルシード(種牡蠣)を作る会社を立ち上げようということになり、六つの浜、十八名の提携生産者とともに、昨年十二月二十一日に「株式会社和がき」を設立したのです。

テーマは「新しい養殖方法」と「新しいマーケット」

実は牡蠣を剥くと、殻付き牡蠣そのままと比べて二粒あたりの単価が下がるという現象が起きています。「それは殻付き牡蠣のまま出荷すれば良いのでは？」と考えられますが、実は問題が二つあります。一つは剥き身の牡蠣は流通が既に確立していますが、殻付き牡蠣は個々の生産者の努力で販売先を作らなければならぬという点です。もう一つは、殻付き牡蠣の出荷するには、殻の形が悪いということ

われています。ホタテの貝殻を夏に産卵される牡蠣の幼生を受け止め育て、ある程度大きくなるまで、一年から二年、ホタテの貝殻に付着したまま牡蠣は育てられます。その場合、一枚のホタテの貝殻に三十個から五十個ほどの牡蠣が付いていますが、小さなホタテの貝殻にそれだけの牡蠣が付いた状態なので成長の過程で牡蠣は色んな形に変わっていき、バナナのような長い殻の牡蠣もできます。剥き身にする場合には殻の形は重要ではなかったのですが、単価の高い殻付き牡蠣を出す場合、形の良いものだけを選んで力ゴに入れたり、耳つりという養殖方法を行い、残りは剥き身にするのが一般的です。つまり、単価の高い、付加価値の高い殻付き牡蠣ばかりを作るには、従来の日本で行われている養殖方法では難しいということなのです。

私がフランス式養殖と呼んでいるのは、次の二つの特徴を持っています。一つはシングルシードであるということです。従来の日本のように種牡蠣から成貝になるまでずっとホタテの貝殻に付着したのではなく、小指の爪の大きさほどになったら、種牡蠣一つひとつを機械でバラバラにします。そしてネットに入れたり、ロープに付けたらして、そのまま成貝まで育てていくという方法です。それによって、形が整い、本来の牡蠣の形の

まま成貝となります。もう一つは、出荷前まで干満の差を利用して牡蠣を鍛えるという点です。従来の日本では種牡蠣をつくる時は干満の差を利用して強い種だけ残しますが、あとは海の中に沈めたままとなっていて、フランスやオーストラリアなどでは干満、または遠浅を利用して満潮時には海に沈み、干潮時には空気にさらされることを通して、出荷前まで干満の差を利用して牡蠣を鍛えています。

メリットは牡蠣の殻がしっかりと締まるために、輸送中に牡蠣が痛みにくく、牡蠣を愉しめる鮮度が長くなることです。

そのような新しい養殖方法を三陸において実現することが一つのテーマだと考えています。もう一つ、大切なことがあります。それはマーケットの開拓です。せっかく付加価値の高い殻付き牡蠣をつくっても、売れなくては何の意味もありません。ましてや付加価値の高い殻

を鍛えています。もう一つ、大切なことがあります。それはマーケットの開拓です。せっかく付加価値の高い殻付き牡蠣をつくっても、売れなくては何の意味もありません。ましてや付加価値の高い殻

を鍛えています。もう一つ、大切なことがあります。それはマーケットの開拓です。せっかく付加価値の高い殻付き牡蠣をつくっても、売れなくては何の意味もありません。ましてや付加価値の高い殻

を鍛えています。もう一つ、大切なことがあります。それはマーケットの開拓です。せっかく付加価値の高い殻付き牡蠣をつくっても、売れなくては何の意味もありません。ましてや付加価値の高い殻



ベトナムの牡蠣を使用している牡蠣料理

夏の美味しい牡蠣

宮城県牡鹿半島産の「夏の牡蠣」雄勝の深い冷たい海に沈めることで放卵を抑制するので真夏でもミルキーな美味しい牡蠣が召し上がれます。そして、東北日本海の夏の風物詩といえ天然岩牡蠣。漁師さんが素潜りで採る正真正銘の天然物です。大きくてコクあって濃厚ですよ！皆様のご来店をお待ちしております。



仙台市宮城野区蒲生耳取 189
営業時間：11～16時(金・土20時迄)月曜定休
問合せ：022-254-5640



宮城県石巻市渡波字祝田 75-5
営業時間：11～20時(ご予約のみ23時迄)水曜定休
問合せ：0225-24-5640



<http://kakigoya.jp/>

焼牡蠣2個サービス

2012年8月15日まで有効

お食事の1グループにつき1枚ご利用いただけます。他のクーポンや割引と同時にご利用できません。クーポンは、お会計時にご提示ください。品切れの場合は、代替品となります。

付き牡蠣をつくって、結局剥いて売ったので、逆に手間がかかる分、収入が減ってしまっています。当然、付加価値に見合った価格で殻付きのまま販売する流通が重要となるのです。

そもそも牡蠣は、世界中で食され、世界中で養殖される海産物ですが、日本などのアジアの一部を除き、世界では殻付き牡蠣の需要が多いです。日本のように殻付き牡蠣よりも剥き身牡蠣の流通のほうが多いというのではなく、殻付き牡蠣の流通が世界標準なわけです。従って付加価値の高い殻付き牡蠣をつくれれば、海外マーケットは巨大であるし、日本食ブームの影響からジャパンブランドとして海外に出せるだろうと考えました。

アジアに大きなマーケットあり

私は和がきの提携生産者との会議の中で、「フランス式養殖を参考にし、世界に通用する牡蠣を作ろう!」世界一の牡蠣を作ろう!」という訴えが起きます。もちろん生産と販売は両輪ですから、世界に売れることも最初から視野に入っているのです。そして「思いは必ず実現する」ということも強調しています。自分たちがそうしたいと強く思い、努力しつづければ必ず実現する、と言って牡蠣生産者を励ましています。



牡蠣産地の道端でうられている牡蠣

そこで実際に、和がきの提携生産者に、本当に自分たちの牡蠣が世界に売れる可能性があるということを確認したい、そのために、まず自分が海外に出て営業をしよう、と思いつき、かき小屋の運営が落ち着いた六月半ば、東南アジアへ約十日間の営業に出ました。

訪問したのはマレーシアのクアラルンプール、ベトナムのハノイ、そしてホーチミンです。まず断っておくと、私は英語があまり出来ません。何とか海外旅行ができる程度です。そのため、予め英語版の簡単な提案書を用意しました。自分が英語で説明できなくても資料を読んでもらえれば意図が伝わると思っていたからです。その上で、簡単な単語を並べながら真剣に相手の眼をみつめれば思いは伝わると思っていたのです。

最初の訪問地、クアラルンプールは、マレーシアの首都ですが、想像どおり、観光客が行く場所と通常の生活する場所の差がとても激しいもので、気候的にも蒸し風呂のような暑さ、湿度と、町のきつい臭いを感じました。到着したのは朝ですが、ホテルへスーツケースを預け、早速、日本で調べていた飲食店リストをまわりました。その中でも世界的に有名なホテルに隣接するレストランに飛び込み訪問したときに、快く話を聞いてくださいました。そのときに、私は感じました。「付加価値の高い日本の牡蠣には興味を持たれている」と。その思いはその後、ベトナムの飲食店まわりしても変わりませんでした。

行った国では、決して、頭から否定せず、きちんとお話を聞いてくださる方が多く、こちらの英語がたどたどしくても、真剣に聞いてくださるどころがほとんどです。ベトナムの首都ハノイでは、飲食店を二十年近くやっているという方など数名の在ベトナムの日本人経営者のお話を聞かせていただきました。真面目と言われるベトナム人ですが、日本人の真面目さを標準に考えたらガツカリすると言われ、日本の仕事に対する姿勢が、ベトナムでは通用しないことを経験者の声として参考になりました。何故なら、遠くない将来、ベトナムに牡蠣飲食店「KAKIGOYA」をオープンさせ、三陸の牡蠣を提供したいと思っているからです。

海外へのマーケット拡大こそ、真の復興への道

私は口癖のように誰に対してもお話しする言葉があります。それは「単に震災前に戻るのではなく、震災前よりも遙かに素晴らしい状況になることが真の復興です」と。

誰でもきつと同じように考えていたらしゃやと思えますが、私は、その言葉を「牡蠣」という一つの食材を通して有言実行したいと思っています。つまり震災前の後継者不足、重労働であった業界が、世界に三陸ブランドの牡蠣を輸出し、若年層も「オイスターファーマー(世界では牡蠣生産者をこう呼ぶ)」になることに憧れる業界に変えたいと思っています。

そしてそれは、牡蠣のみならず、東北に住む私たちが、さまざまな食材で海外へマーケットを積極的に拡大することが、真の復興を拓くものと考えています。

その結果、三陸の食が世界的なブランドとなり、三陸に世界中から観光客が押し寄せ、三陸の景観と美味しい食を愉しめる世界有数の観光スポットなることで、震災前よりも遙かに素晴らしい三陸になると、私は信じています。

この第二号では、東北震災の大津波で最大の被害者を出した宮城・石巻の現在に関する特集を組みました。あまりにも重いテーマであり、当新聞の力量問題と併せて、取上げることにためらいもありました。

しかし、当新聞がこの問題を避けて通るならば、新聞の名称である「東北復興」は取り下げなくてはなりません。また、新聞を創刊する決めた時点で、当たり障りのない紙面づくりをしようとはまったく考えませんでしたので、自然な成り行きであることも確かです。

あとは、どこまで実態を伝えることが出来たか、当特集に対する石巻の被災者の方々のきびしい批判を真摯に受け止めるしかないと考えております。

また、取材も、ほんの一部地域しかカバーできませんでした。残りの地区はいずれ必ず取材してご報告することを約束いたします。

最後に、今回は、特集のみならず、取材先の皆さんに絶大なご協力をいただきました。特に小熊参議院議員には、お忙しい公務を縫って、名もない新聞のために長時間の取材に対応いただき、感謝申し上げます。まことにありがとうございました。

ホーチミンは、ハノイと同じベトナムの中心都市ですが、同じ国かと思うほど景色が違います。ホーチミンの発展はめざましく、区画整理地域へ行くくとベトナムとは思えない景色が広がります。ちなみにベトナムでも牡蠣養殖は行われ、ハロン湾のほうの北部では牡蠣筏で、ホーチミン郊外の南部では川で養殖が行われています。

三つの都市の飲食店をまわり、地元商社をまわり、牡蠣生産者とお会いする中で感じたことは「ジャパンブランド」の威力でした。それと同時に、真の三陸復興のために新たな養殖方法を行い、新たな販路拡大のために、こうして日本から来ているということに共感されました。

ベトナムでは一般の仕事で月収が二、三万円ということだけ見れば、まだマーケットは小さいと考えがちですが、しかし街中走っているバイクは平均月収の数倍しても持っているのが当たり前です。日本食レストランが非常に注目されていますが、ベトナムでそれだけの価格でも繁盛している。さらに日本のように競争が激しい世界ではなく、これから高度成長していく社会なのです。なおかつ、昔の日本の高度成長時代の中で、現在のインターネットが浸透している社会が、現在のベトナムや他の東南アジアなのです。

編集後記

は、東北震災の大津波で最大の被害者を出した宮城・石巻の現在に関する特集を組みました。あまりにも重いテーマであり、当新聞の力量問題と併せて、取上げることにためらいもありました。

しかし、当新聞がこの問題を避けて通るならば、新聞の名称である「東北復興」は取り下げなくてはなりません。また、新聞を創刊する決めた時点で、当たり障りのない紙面づくりをしようとはまったく考えませんでしたので、自然な成り行きであることも確かです。

あとは、どこまで実態を伝えることが出来たか、当特集に対する石巻の被災者の方々のきびしい批判を真摯に受け止めるしかないと考えております。

また、取材も、ほんの一部地域しかカバーできませんでした。残りの地区はいずれ必ず取材してご報告することを約束いたします。

最後に、今回は、特集のみならず、取材先の皆さんに絶大なご協力をいただきました。特に小熊参議院議員には、お忙しい公務を縫って、名もない新聞のために長時間の取材に対応いただき、感謝申し上げます。まことにありがとうございました。

【Tiny Log】
用途ご自由のまるいケース
革は薄めの柔らかなものを使用
サイズ:70mm(縦)×70mm(横)重量:40g
価格:¥3,500(税込み)
⇒ ¥2,800(税込み)

☆**革物屋**☆
かわもんや
<http://prewords.jp/>
E-Mail: contact@prewords.jp
TEL/FAX: 042(562)3507

Prewords

新聞創刊
ディスカウント
(20% OFF)

※カラー展開はそれぞれ5色
オレンジ:鮮やかな橙色、使い込んだ後の渋みが楽しみ
キャメル:5色の中で最もヴィンテージ感のある色合い
ブラック:スタンダードな黒、ビジネスにもプライベートにも
ワインレッド:落ち着きのある大人の赤
グリーン:深みのある優しい緑

【Handy Pouch】
モバイル機器収納など、用途は自由自在
革は薄めのやわらかいものを使用
手触り感を重視
サイズ:105mm(縦)×210mm(横)×60mm(奥行)
価格:7,800(税込み) ⇒ ¥6,240(税込み)